

# 「日本写真保存センター」調査活動報告(7)

松本 徳彦

(専務理事、日本写真保存センター設立推進連盟事務局長)

日本写真家協会(JPS)は、平成22年度も文化庁からの委託事業として「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」を実施することになった。

調査活動は19年度以降4年間にわたって継続して、物故写真家の写真フィルムの所在と保存状況の確認を行ってきた。延べ50数名、約238,000本の35mmフィルムと約45,000枚のシートフィルムの調査をした。戦後の激動した時代を記録してきた膨大な量のフィルムは、遺族のもとで押入れやタンスの中、物置などに、ダンボール箱や菓子箱、缶などに入れて保存されてきた。これらのフィルムが湿気や高温などで深刻な劣化をもたらしていた。フィルムが加水分解による劣化、いわゆるビネガーシンドロームを起こしていて、使用できない状態のものが多数見つかった。前回訪問して保存環境がよくないことを指摘し、保存場所の移動をお願いした。それにより遺族は保存場所を(1階居間から2階の乾燥した場所へと移す)移動されたのはよかったが、汚染していた紙製のネガホルダーをDP店で使われているポリエチレン製のネガホルダーに移し替えたために、乾燥が進んだか、ネガホルダーの材質に問題があったためか、フィルムが棒状に丸まって平面が保てない状態になっていた。遺族への保存方法の説明が適切でなかったのかと、注意の仕方を工夫する必要があることを痛感した。

また、遺族の手元から地元の歴史資料館にフィルムの保管を依頼されているものについては、資料館学芸員によって整理され、温湿度管理の行き届いた収蔵庫で保存されていたため、保存状態も良好と判断された。いずれにしてもフィルムを収めるネガホルダー、収納箱などの安全基準(ISO)を一般に周知広報する必要があると感じた。

## 本格的な収集・保存の開始に向けて…

JPSは、平成18年から文化庁に対して「日本写真保存センター」の設立を要望してきた。これは時代を記録した写真原

板の散逸を防ぎ、保存管理し活用を図ることが求められており、我が国の歴史・文化を後世に残し伝えるためにその設立が必要であると考えたためである。この要望を受け、文化庁は平成19年度から、「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」に関する予算を措置し、JPSに調査研究を委託した。

これらも踏まえ、写真フィルムの本格的な収集・保存の開始に向けて、平成22年5月から、文化庁との間で調整が開始された。具体的には、日本の写真界の代表として全国の写真フィルムの保存に取り組むため、東京国立近代美術館フィルムセンター(映画フィルムの収集管理)の相模原にある収蔵庫の一部(500㎡未満)を、写真フィルムを保存する写真保存センターに提供する案が提示された。ただし、光熱費・ネガの搬出入に要する経費、書庫等経費、その他の経費は、(社)日本写真家協会負担とするとともに、保存する写真に関して何か起きた場合、責任は全て(社)日本写真家協会とすることとされた。

この提示案をもとに、文化庁、国立美術館、フィルムセンター関係者と相模原の収蔵庫の利用について協議を行った。この収蔵庫は映画フィルムを保存するためのものとして設計されていて、室温10℃、湿度40%に設定されているので、この場所を区切ってフィルム整理などの作業をすることは不可能であるとのことであった。今後は、具体的な保存計画や保存方法等について、文化庁との間で協議を行っていく予定である。

フィルムを相模原で収蔵することになるが、問題は遺族の元から収集したフィルムをクリーニングして、スキャニングしたり、データベースを作成するための作業室を別途設ける必要があることである。現在はJCIIビル3階の小会議室(約20㎡)を借りて作業をしているが、手狭で本格的な整理作業をするには現状の3倍くらいのスペースが必要である。調査研究スタッフについては、22年度は4名分(年120日)が措置されているが、来年度は年約200日分ほど確保したいところである。

## 22年度の調査活動…

平成22年度の調査活動は、4月、JPSが保管している名取洋之助ら(日本工房、サンニュース時代のもの)2,600本を中性紙のホルダーに入れ替えた。7月、早田雄二(映画スターなど)の写真フィルムを管理しているマーメイドを訪ね、管理状況を確認する。吉岡専造の「吉田茂」原板(35mm70コマ)は子息から預かり、写真集との使用ネガの確認を終えた。保存状況は良好であった。中村由信の「瀬戸内の人々」「日本方言図鑑」のフィルムを調査したが、ビネガーシンドロームによる劣化のほかに、ネガホルダーの交換と乾燥によって、フィルムが棒状に丸まったものが多数見つかった。品川歴史館に保存されている中村立行(ヌードと戦後スナップ)のフィルムは、整理もよ



中村立行ネガの調査(品川歴史館)

撮影・高井潔



掛川源一郎のネガ調査(北海道立文学館)  
撮影・松本徳彦

く状態は良好であった。10月、蔵原輝人(民芸、俳優座等の舞台写真)のフィルム(17,109本)を収集する。11月、北海道立文学館で保存されている掛川源一郎(アイヌ民俗文化)のフィルム(5,227本)は、写真集並びに写真展に使用されたフィルムがまとめて新しいホルダーで保存されていた、良好であ

る。12月、向井潔(筑波学園都市などの建築写真)のフィルム(686本・プリント1,205枚)が遺族から持ち込まれ調査をしている。

また、7月23日、大東元、田中徳太郎、吉田潤、竹内廣光、野上透の写真原板約17,000本を、フィルム専用(10℃、40%)の共進倉庫(調布市)に預け、長期保存を図っている。

9月、劣化の激しい中村由信の写真原板を富士フィルム足柄工場で修復可能かどうかのテストを依頼した。結果は修復不可能との回答を得た。また、蔵原についても大半が劇団の舞台をとらえたもので、再使用の見通しの少ないものが相当数に及んでいる。向井の建築写真原板については収集基準としている写真集に掲載されたものがなく、収集をするかどうかの判断を委員会で行うことにした。

### 分科会による調査研究…

・権利処理部会では、第1期に保存センターが収集する写真原板は、1945年から1970年頃に活躍された写真家の写真集や印刷物等で公表されたフィルムを保存する。収集にあたっては著作権者の遺族からの「寄贈」を原則とするとしている。この原則に基づく「著作権譲渡契約」を結んで、収蔵ならびにデータベース化を行い、公衆の利活用に供することにしている。

遺族の希望によって一部「寄託」という案も検討している。

・データベース部会では、収集した写真原板の詳細な記録(撮影者名、撮影内容、撮影年月日、場所、掲載書名など)と整理番号(著作権者名、受付番号、ID、収蔵場所など)の情報を登録し、閲覧できるようにする。閲覧は一般公開用はWeb上で、研究用は保存センター内のPCで閲覧するといった二重構造を検討している。

・広報部会では、文化庁の委嘱を受けて実施している「写真保存センター」(アーカイブ)の活動状況を広く公衆に知らす必要から、日本カメラ財団の協力を得て、JCIフォトサロンで「ときを刻んだ写真一保存が望まれるフィルム」展とシンポジウム「なぜフィルムの保存が必要か」を催すことを決めた。写真展は平成23年3月1日(火)～27日(日)、シンポジウム(パネラー:金子隆一、高橋則英、松本徳彦)は3月5日(土)JCI6階で午後1時から催すことにした。

写真展は調査対象の木村伊兵衛(敗戦直後の東京、秋田)、濱谷浩(雪国、裏日本)、田村茂(現代日本の百人)、菊池俊吉(銀座4丁目、栄養失調の戦災孤児)、山端庸介(原爆の長崎)、

植田正治(家族、砂丘)、大東元(東京雪景、カジノ座楽屋)、吉田潤(復員、笠置シズ子)、岩宮武二(佐渡)、田中徳太郎(白鷺)、緑川洋一(瀬戸の人々)、掛川源一郎(アイヌ民族)、川嶋浩(メーデー事件)、中村立行(戦後スナップ)、中村由信(日本方言図鑑)、吉岡専造(吉田茂首相)、稲村隆正(ジブシー・ローズ、永井荷風と浅草)の17名の写真作品とビネガーシンドロームに侵されたフィルム、資料などの現物展示をする。

### 画像劣化の要因

保存要因	熱(温度)、湿気(湿度)、光
現像要因	残留薬品、硬膜処理、乾燥条件
材料要因	画像銀、カプラー(色材)、染料、顔料 添加剤、バインダー、支持体
劣化物質	画像物質 色素、染料、顔料、銀 バインダー ゼラチン、ポリマー類 支持体 ナイトレートフィルム アセテートフィルム ポリエステルフィルム 紙、RC紙、ガラス、金属
包材	ケース、フォルダー、台紙

### 感光材料・印画紙を長期保存のための温湿度条件

( )内は10年程度の中期保存

感光材料の種別	支持体(ベース)	相対湿度RH%	最高許容温度℃
白黒フィルム	セルロース	15~50	21
	トリアセテート	(15~60)	(25)
	ポリエステル	30~50	21
カラーフィルム	セルロース	15~30	2
	トリアセテート	(15~30)	(10)
	ポリエステル	25~30	2
乾板	ガラス	30~40	18
		(20~50)	(25)
印画紙	バライタ	30~50	15~20
カラープリント	樹脂コート	30~50	2

### ビネガーシンドローム(Vinegar syndrome)

フィルムの劣化は、最初に酢酸臭がするようになる。

続いて、フィルムの表面がべとつき、白い粉の析出、波打ち、ワカメ状の変形へと進み、画像の崩れ、フィルムベースの破壊(粉々に分解)が起こる。

そうしてフィルムを発見したらすぐに、他のフィルムと隔離(密封できる袋に入れ)して破棄することを勧める。

酢酸臭はフィルムを密閉度の高い容器や通気の悪いプラスチックや金属缶、ビニール袋、シールしたポリ袋などに長期間入れたままだと起りやすい。さらに、温度が24℃、相対湿度50%ともなると約30年でビネガーシンドロームが起こる。30℃、50%以上だと約15~20年で、35℃、70%にもなると6~7年で起こる。

この酢酸臭は一度出始めると止めることはできないという厄介なものである。暫定的な延命措置は、乾燥した通気性のある場所にフィルムを移した後、低温、低湿度(20℃、50%以下)の環境で保存されることをお勧めします。